

統計で見る大韓民国の女性の生き方 (1)

鄭花玉¹

日本では、今年の10月に国民の社会生活の実態を調査する「社会生活基本調査」が実施されることになっている。

そこで、大韓民国における女性の社会生活に関し、男性を戸主とする家父長的な風習のある社会の中でどのような生き方をしてきたのか、統計データから見てみる。

1 概要

昔、大韓民国は儒教の影響で家父長的な大家族制であり、家を守り続けるために戸主になる人は男だけであった。この戸主制は父系血統を重視しており、夫婦両性が平等といえるものではなかった。特に長男は戸主相続権があり²、その家のほとんどの財産を相続する一方、父母を扶養して暮しを支えるほか、先祖の忌日を記念し、お墓を守り続けるなど、重要な役割を果たしてきた。

ここでは、このような社会で韓国の女性がどのように生きてきたのかを、女性の人口、女性と家庭、女性と社会の観点からふれたいと思う。

まず、韓国の現在を理解するために社会変化について簡単に紹介する。1945年、韓国と北朝鮮に分かれ、1950（昭和25）年6月に北朝鮮は南侵戦争を起こした。戦争はようやく1953年7月に終わ

ったが、戦後の廃墟でほとんどの国民が貧しくなり、生活用品などが足りなくなった。戦争に行った男性が家庭に戻り、子供がいきにくまれたベビーブームが1953年以後にはじまった。

1953～60年半ば頃のTFR（合計特殊出生率）³は5～6人、1961年の韓国の人口増加率は3.01%となり、人口ピラミッドは多産多死の三角形になった。政府は1962年から経済5ヵ年計画に取り組み、その後、工業の拠点が形成されていった結果、農村において大家族を構成していた人々が都市へ流出することになった。工業化と人口の都市集中等は、農業社会から産業社会への移行、親子関係中心の3世代の伝統的家族から夫婦関係中心の核家族への変化をもたらした。

経済計画と共に家族計画事業推進（出産抑制政策）がはじまり、政府は子供が生まれないように勧告し、また、医療技術の発達の普及によって、1983年のTFR（合計特殊出生率）は2.08人になり、人口置換水準といわれている代替出産力まで減少した。

1997年には外貨危機に遭ってIMFの支援を受けた結果、ウォンの価値が低くなり、一部大企業や銀行などが倒産し、失業率が7.0%まで上がり、家長が失業者になった等男性の経済力が弱くなっている反面、女性の社会活動は増えており、男性

1 韓国統計庁の課長で2005年7月から日本の総務省統計局に勤務している。

2 民法上、戸主を中心にして家族を構成する制度。

3 その年の女性の年齢別出産パターンを一生の間のできごととみなした場合の子供の平均出生数。

優遇の慣習も徐々に弱まっている。

1980年代に晩婚化、非婚化が緩やかに進み平均初婚年齢が上昇し、また、未婚率と離婚率は上昇しているが、外貨危機が契機になって更に高くなっている。2000年代にはこのような背景で少子化と高齢化が進展してTFR（合計特殊出生率）も急速に低下している。

韓国の大体の家では、日本の家系図にあたる族譜をもっている。これは、公的には戸主制度の戸籍にあたるもので、家系の族譜である。昔、そこには女性である娘の名前は入ることが出来なかった。お墓参りも女性は行くことができず、もっぱらその準備をするばかりであった。娘は自分の家では可愛いが他家の嫁になるため、あまり重要ではない人間として扱われた。娘は嫁になり、主人の族譜に入るが、それも名字だけ入れていた。

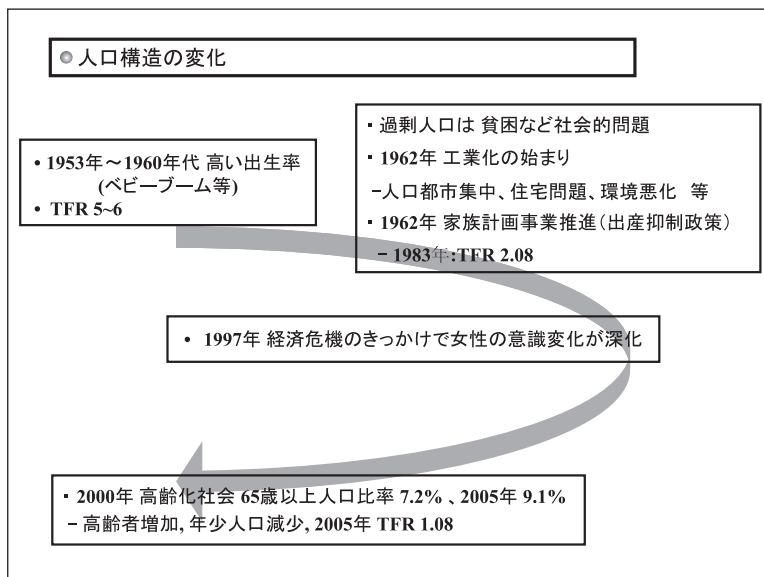
このような意識が強く残っている中で、政府は女性の地位を引き上げるため、また、男女差別を解消するために「男女差別禁止及び救済に関する

法律」⁴などを制定したが、戸主制度が残っている限り、根本的な差別は解決されていないと言われている。女性団体等は、差別の根本原因は戸主制度にあると考え、戸籍法の改正運動を広く展開してきて、ようやく、長男だけに与えられてきた戸主相続権の制度が廃止された（2005年3月）。

統計庁では1997年以降、毎年、女性週間（7月第1週）に「統計で見る女性の生き方」を公表してきた。これは、女性の生き方が経済・社会・文化と共にどのように変化しているかの実態を明らかにするために、関連統計を集めた客観的な統計情報である。

女性に対する政府の取り組みとしては、1988年2月に政務長官室で女性対策業務を開始したが、その活動はあまり活発ではなかった。10年後の1998年2月に女性特別委員会が設置され、2001年6月に女性部（省）を設置し、現在は女性家族部

4 「男女差別禁止及び救済に関する法律」は1992年制定・2005年廃止。



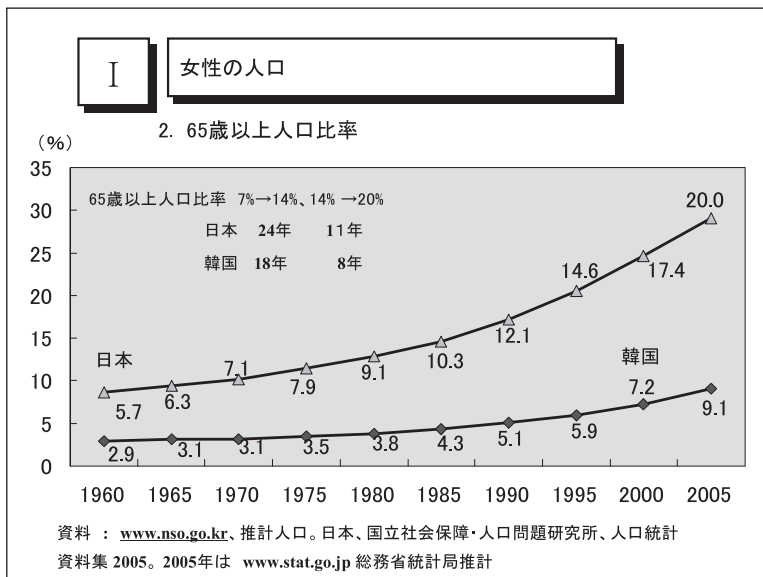
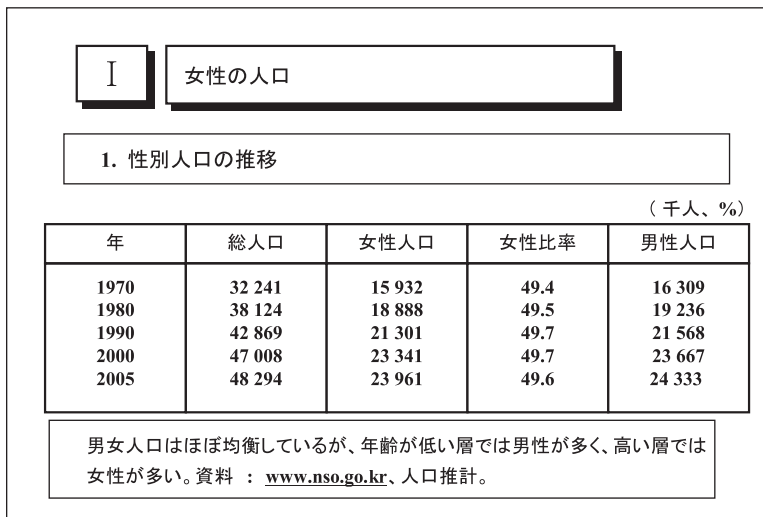
(省)⁵となっている。

- 5 女性家族部は、女性政策の企画・総合、家庭暴力・性暴行防止及び被害者保護、性売買防止及び被害者保護、女性の權益増進など女性の地位向上、家族政策の樹立・調整・サポート及び幼児保育業務をしている中央行政機関。

2 女性の人口

1) 性別人口の推移

韓国統計庁の人口推計によると、総人口は1970年32,241千人、1990年42,869千人、2005年では48,294千人で、1970年に比べて1.5倍に増加している。女性は23,961千人で49.6%、男性は24,333千



人で50.4%と、男性が372千人多い。常に男性の方がわずかに多くなっているが、大体均衡していると言える。

2) 65歳以上人口比率

一般に、65歳以上の人口の比率が7%を超えた社会を「高齢化社会」、14%を超えた社会を「高齢社会」と呼んでいる。韓国では65歳以上人口の比率が2000年に7.2%になり、2018年には14%、2026年には20%になる見込みである。すなわち、韓国では高齢化社会から高齢社会まで18年、その後8年で超高齢社会（65歳以上人口比率が20%以上）になると展望している。

日本の場合は、高齢化社会（1970年）から高齢社会（1994年）まで24年、超高齢社会（2005年）までには11年かかっているが、韓国の高齢化は日本を上回るテンポで進んでいる。

3) 女性100人当たり男性人口（性比）

女性100人当たり男性の数（人口性比）は、1975年以後101.3～101.8で、常に100.0をわずかに超え

ている。年齢別にみると、9歳以下では高いが、30～39歳では出生性比に近い。60歳以上の性比は低くなっているが、近年になるにつれて緩やかに上昇している。

年齢が高くなると人口性比が低くなるのは、年齢が高くなると男性の死亡率が高くなるからである。2004年人口動態統計を見ると、50～59歳の男性の死亡率は女性の3倍高くなっている。人口千人当たりの50～59歳の死亡率は、女性が2.8人、男性が8.2人、60～69歳では女性7.7人、男性19.5人である。

4) 平均寿命

韓国の平均寿命（0歳時平均余命）は伸び続けている。1971年の平均寿命は、女性は66.1歳、男性59.0歳で、女性が7.1年長かった。女性の平均寿命は男性に比べて常に長く、1991年には、女性は75.9歳、男性は67.7歳で、この20年間に女性は9.8年、男性は8.7年伸びた。

2003年の平均寿命は女性80.8歳、男性73.9歳で、32年前の1971年に比べると、女性は14.7年、男性

I 女性の人口				
3. 女性 100人当たり男性人口（性比）				
（人）				
年	全体	9歳以下	30～39歳	60歳以上
1975	101.4	108.5	103.0	67.2
1980	101.8	107.6	107.5	67.9
1990	101.3	109.2	105.6	64.6
2000	101.4	112.7	104.7	70.3
2003	101.4	111.5	104.9	72.2
2005	101.6	109.9	105.7	73.9

2005年60歳以上では女性100人に対して男性は73.9人。
資料： www.nso.go.kr、人口推計。

I 女性の人口			
4. 平均余命			
(年)			
年	女性	男性	差
1971	66.1	59.0	7.1
1981	70.5	62.3	8.2
1991	75.9	67.7	8.2
1997	78.1	70.6	7.5
2001	80.0	72.8	7.2
2003	80.8	73.9	6.9
*日本2003	85.3	78.4	6.9

資料:www.nso.go.kr、生命表。
*日本, 国立社会保障・人口問題研究所、人口統計資料集, 2005。

は14.9年長くなって、男女差も少し縮まっている。なお、女性は1981年、男性は1997年に平均寿命が70歳を超え、2001年には女性の平均寿命が80歳を超えている。

日本の場合、2003年の平均寿命は女性85.3歳、男性78.4歳で、韓国より男女共に4.5年長くなっている。(つづく)

(ジョン ファ オク

大韓民国統計庁課長 日本国総務省統計局派遣官)